セッションⅠ　地域からみた文化形成

ローカル・ナショナル・グローバルの相互関係
—四竈兄弟と仙台地域の音楽文化を中心に—[1]

マーガレット・メール*

【要旨】

明治維新や明治時代を充分理解するためには日本国だけ、あるいは、日本対西洋というbilateralなアプローチだけでは難しいと思われる。従って、この小論文では、明治文化をグローバル・ヒストリーの視点から検討しようとする。ここで考えるグローバル・ヒストリーとは、例えば地方の歴史（あるいはローカル・ヒストリー）を調べても、そのグローバル・コンテクスト、すなわちグローバルな歴史発展を参考にするのである。音楽の場合は、明治時代の西洋音楽の受容を西洋音楽のグローバリゼーションの一面として検討することである。ここでは、明治の音楽文化を「地域／都市からみた文化形成」の上に、「世界から」という面も加えて、仙台出身の音楽の先駆者、四竈訥治と四竈仁爾の役割、そして四竈訥治の編集した『音楽雑誌』のローカルとナショナルを結ぶ役割などを論じて、西洋音楽の普及をふくめて音楽の発展に努めた地域の活躍者（local actors）の重要性を強調する。

グローバル・ヒストリーの視点からの明治文化

明治維新や明治時代を充分理解するためには日本国だけ、あるいは、日本対西洋というbilateralなアプローチだけでは難しいと思われる。従って、この小論文では、明治文化をグローバル・ヒストリーの視点から検討しようとする。いわゆるグローバル・ヒストリーとは、最近益々注目を浴びるようになったが、著者はすでに20数年前に発表した『歴史と国家』において、「歴史学と国民国家とのつながりは、決して日本だけに特有のものではない」と指摘し、キャロル・グラックとジェフリー・バラクラフを参考にしながら、1890年前後からは、世界がいわゆる「現代」に突入したという背景があって、「日本の発展は、多くの面でいくつかの西洋諸国と並行していた」ことを述べた。そして、『歴史と国家』の結論では、「私がここで日本におけるドイツの影響を簡単に紹介したのは、日本におけるドイツの影響の程度を強調することにあるわけではなく、むしろ日本とドイツがいかに似た課題に直面していたかをしめすことにある。新しく形成された国民国家は、意味で充填されねばならず、また列強のなかで自国の位置を定めなければならなかった」と述べた[2]。

すなわち、1998年当時、従来の近代日本における西洋の影響を巡る議論は行き詰まりをみせていたのである。そこで、19世紀のいわゆる現代世界（contemporary world）において、ドイツや日本の両方が直面した共通の挑戦（チャレンジ）に対する共通の、あるいは似ていた反応を示した。

拙著『歴史と国家』を初めて書いた時の議論はまだ粗末であり、その議論は、従来の解釈に対して挑戦的であったことを当時どのぐらい意識していたか、いまさら分からない。が、今考えてみると、粗末な議論でありながら、最近よく注目されるグローバル・ヒストリーのアプローチとの共通点があるのではないかと思われる。例えば、ク

＊コペンハーゲン大学准教授

リストファーL.ヒル氏は*National History and the World of Nations*（国史と国民国家の世界）という著書を出したが、日本・アメリカ合衆国・フランスを中心に、19世紀のグローバルな政治・経済のコンテクストにおける国民国家、資本主義と国史（国民国家の歴史を書くこと）の関係を議論している[3]。

グローバル・ヒストリーのアプローチに関する著作は数々あるが、筆者が主に参考としたのは次の二つである。一つは、ユルゲン・オースタハメルの『世界の変容：19世紀グローバル・ヒストリー』、もう一つは、セバスチャン・コンラッドの『グローバル・ヒストリーとは何か』という著作である[4]。ちなみにコンラッド氏は、もともと日本歴史が専門で、博士論文（ドイツ語）は『失われた国民国家を探す―西ドイツと日本の修史1945－1960』という題であった[5]。

以上述べた歴史著作を参考にしながら、グローバル・ヒストリーのアプローチは何かというと、例えば明治時代を検討するときは、日本だけでなく、また西洋文化の日本への影響だけでもなく、オースタハメル氏のいわゆる「世界の変容」というコンテクストにおいて、19世紀の日本がどのように発展したのかという見方で再検討することが課題になる。

グローバル・ヒストリーと音楽

音楽とグローバル・ヒストリーは最適なコンビネーションであると言えないだろうか。例えば、日本の西洋音楽の受容は、その西洋音楽の世界中の普及、すなわち西洋音楽のグローバリゼーションのコンテクストの中で見ないと充分に理解できないことが多いと思われる。実際、オースタハメル氏は「世界の変容」で音楽について少ししか述べていないが、別の著作（雑誌論文）では西洋音楽の世界中の普及をテーマにしている[6]。それでも、専門外の歴史家で音楽史を扱った例はあまり多いとはいえないだろう。その数少ない歴史家の一人はティム・ブランニングである。著書『音楽の勝利』[7]では、近代史全体の発展を見ると、音楽は特に次の五つの面で展開したと論じている。

1．Musicians' status　音楽家のステータス・身分
2．Purpose　音楽の目的・意思
3．Places and spaces　場所・空間
4．Technology　技術（楽器・録音）
5．Liberation　解放

ここではすべてに言及しないが、(2) の音楽の目的・意思と (3) の場所・空間、もしくは (5) の解放については後で述べることにする。次に、明治23年（1890）に創刊された、日本最初の音楽専門雑誌『音楽雑誌』を紹介しよう。

『音楽雑誌』の面白さ

私が日本におけるヴァイオリンの歴史を研究し始めた際に[8]、『音楽雑誌』を大いに参考にした。その時には、主にヴァイオリンに関する情報を検討したのであるが、それ以降、読めば読むほど、その雑誌の面白さを感じるようになった。後で興味を惹いた特徴を述べることにするが、ここで述べたいのは、グローバル・ヒストリーの視点からの面白さである。

まず、明治23年（1890）9月25日発行の第1号から"The Musical Magazine"という英語のサブタイトルがあることが興味深い。それだけでなく、「発刊の主旨」では、フランスのパリで出版される音楽関係の週刊雑誌（*La Revue et Gazette Musicale*か）や「ヒガロー」新聞が週に一回出している付録としての音楽誌の維持の困難を指摘するのである。発行者の四竈訥治は、西洋の事情に精通していることはもちろんであるが、それだけでなく、自分の活動のグローバル・コンテクストも多少意識しているといえるのではないか。19世紀のグローバル・コンテクストというと、西洋の大国の覇権でもあるが、明治時代の日本人の多

くは、日本はそのうち大国の列に入るだろうと期待していたのではないかと思われる。

音楽雑誌のもう一つの面白いところは、扱っている音楽の範囲である。以上に述べた「発刊の主旨」では、四竈訥治が主に西洋音楽を巡る活動を述べているが、雑誌の内容を見ると、日本音楽や当時盛んであった明清楽に関する記事と情報が非常に多い。発行者四竈にとって、教育制度では西洋音楽が中心になっていたにも関わらず、日本音楽や明清楽は決して軽視するものではなかった。「発刊の主旨」は「今や吾邦百般の事業は日に改良の途に赴き、月に文明の域に達するに至り」で始まり、38号と39号で四竈訥治は「音楽改良」を論じている。その前の17号（明治25年（1892）2月）の「雑纂」の欄に次のことを強調している。

> 吾音楽雑誌を評して西洋音楽の機関となし往々厭ふものある由に聞くが本誌の本領は決して西洋主義を主張するものにあらず又日本僻にあらず西洋となく東洋となく博く音楽界を跋渉し正を採り弊を改め優を蒐めて卑を去り長を採り短を補ふ音楽改良主導者なり而して此間音楽の改良進歩を謀るに際して公明潔白の方針に遵ひて運動す豈あに他あらんや[9]

以上で明らかなように、「音楽改良」を簡単にいうと、西洋音楽と日本音楽（あるいは明清楽を含めた東洋音楽）の一番いいところを結合することによって、日本の新しい音楽を創るという考えであった。いわゆる「音楽改良」あるいは「邦楽改良」は、すでに『明六雑誌』に掲載された神田孝平の「国楽ヲ振興スベキノ説」に、「音楽歌謡戯劇」が「改正振興スベキ」ものの例としてあげられていた。そして、明治12年（1879）に開設された音楽取調掛の担当官（御用係）になった伊沢修二も音楽改良の主張者の一人であった[10]。結局、その考えは、伊沢・四竈などが思ったようには実現しなかったが、近代国家には国楽（national music）が必要だというのは、やはりまたグローバルな近代化のもう一つの現象である。例えば、『音楽雑誌』が出たほぼ同じ時期に、アメリカ合衆国では1893年にアントニン・ドヴォルザーク作曲の「新世界」交響曲が初演された。初演は、大いに新聞などで取り上げられ、アメリカ国にふさわしい音楽とは何であるかという問題についての活発な議論のきっかけにもなったのである。

以上では、大雑把でありながら、グローバル・ヒストリーの中の『音楽雑誌』について述べた。以下では一転して、ローカル・ヒストリーを見ていく。

ローカルの視点から
―仙台出身の音楽の先駆者、四竈訥治と四竈仁爾

『音楽雑誌』を初めて調べたときにもう一つ興味深かったことは、地方からの通信である。特に「仙台通信」が私の興味を惹いたのである。例えば、すでに第２号に、「宮城縣の音楽」という題で、仙台市を中心に、当時の音楽の状況が２ページに渡って紹介されていた。小学生の音楽（唱歌）に対する学習進度の調査の結果まで上げられている。

後で分かったのであるが、四竈訥治は仙台出身で、その弟にあたる四竈仁爾は仙台で音楽を教えたり、さまざまな音楽活動を行なった人物であるので、『音楽雑誌』で盛んに扱われてもおかしくはない。

では、四竈兄弟の履歴を簡単に紹介しよう。仙台藩士・四竈信直の長男と次男（四男・孝輔は海軍中将、侍従武官などを務めた）として生まれた。訥治と仁爾は二人とも明治17年（1884）に文部省音楽取調所に府県派出伝習生として入学した。長男の四竈訥治（訥堂1853-1928）の履歴は以下の通りである[11]。

仙台藩校養賢堂、中村正直の塾で教育を受ける

1884年　弟に遅れて文部省音楽取調所に府県派出伝習生として入学
1885年　音楽取調所を卒業し、東京師範学校（1888年まで）、東京唱歌会、東京音楽学校（1892－4年）などで教師を務める
1890年　『音楽雑誌』を創刊・編集して、音楽独習書、曲集などを出版
1895年　東京少年音楽隊を結成
1896年　仙台に移り、仙台で少年音楽隊を結成
1900年　弟と「知育鉄道唱歌」（奥州下り）出版
1901年　蚕業唱歌（佐野製糸場）

なお、四竈訥治の1900年以降の情報はごく少ないが、いままで手に入ったのは次の三つである。

1.「父は四竈訥治（五十一）というて仙台の人、(…今は并オリンと一管の筆を携へて東北の野に放浪して居る、訥治は書にも巧である)」「麦酒店の楽手―稲妻小僧事件の四竈蘭子」（『朝日新聞』明治42年（1909）9月22日、朝刊5頁）

2.「音楽界の元老たる同氏の来簡に曰く『訥堂音楽家に非ず一管の筆一張の琴を携へ隷書と画像を揮毫して諸国を遍歴しつつある行脚の身なり今を距たる明治三十年偶々感ずるところありて全国漫遊を企て縁あれば住し縁んければ去る単身弧旅最初東京より奥羽六県北海一道を経後又秋田新潟の両県を経今此の前橋に来たりて暫く枕を停め公衆の嘱しょくに応じて揮毫中なり』と」（「楽人動静」『音楽界第』160号、大正4年（1915）2月、60－61頁）

3.「土浦町大和町川口に当分住居して琴書を友とすと」（『音楽界第』189号、大正6年（1917）2月、50頁）

兄の訥治とは違い、四竈仁爾は音楽取調所を卒業して仙台にもどったあと、故郷を去ることはほとんどなかった。四竈仁爾（静堂 1863－1941）の履歴は次の通りである[12]。

1881年　宮城師範学校を卒業
1884年　文部省音楽取調所に府県派出伝習生として入学
1885年　音楽取調所を卒業、宮城師範学校に奉職
1887年　宮城師範学校教師のかたわら、松操学校、仙台第一・同第二両中学校、第二高等学校、陸軍幼年学校などの音楽教師を務める
1888年　宮城師範学校に宮城音楽講習会を設立
同年10月　宮城音楽会結成
1893年　鳳鳴会結成
1911年　宮城師範学校を退職、嘱託として1932年まで勤務
1923年　宮城県立盲唖学校校長（1914創立、市内外記丁、宮城県師範学校構内）

以上の履歴で明らかなように、四竈訥治は音楽取調所を卒業してから十年以上東京に残って、いろいろな音楽活動に携わったのに対して、四竈仁爾は仙台に戻って、一生、仙台の音楽教育と音楽文化の形成に努めた。

地域の音楽文化と四竈仁爾

ここで、四竈仁爾のさまざまな音楽関係の仕事・活躍から一例を取り上げて、先に述べた履歴に出ている鳳鳴会を扱うことにする。鳳鳴会の主旨は「音楽の真理を研究し移風易俗いふういぞくの実を挙ぐる」という[13]。『音楽雑誌』にはその後、鳳鳴会の演奏会についての報告があるが、例えば、明治27年（1894）6月3日の「第三回大集会概況」は特に詳しい記事があって、その大集会は仙台市の五城館で開かれ、300人が集ったという[14]。会員の「君が代」演奏や会長の四竈仁爾の開会の言葉のあと、音楽の演奏が15番もあったが、その四つ

が薩摩琵琶の名手の吉水経和の演奏で、他には和楽、八雲琴、清楽で、西洋楽という題も出ているが、「西洋楽」の曲名は、「六段」も含めているので、どういう意味で西洋楽なのか疑問である。他には、「雫しずくのちから」、「進行曲」、「浮雲」、「露営」もあるが、「浮雲」は尺八の曲のタイトルでもあり、唱歌のタイトルでもあるのでどちらを示すか明らかではない。少なくとも「六段」は多分、西洋音楽というより、いわゆる和洋合奏であったと思われる。1900年前後、西洋楽器を使って箏曲などの日本のメロディーを演奏するのが流行った[15]。薩摩琵琶演奏の一曲目は「鳳来島」になっているが、清楽曲名との間違いで、実際は「蓬莱山」ではなかっただろうかと思われる。「蓬莱山」は作者不明の（あるいは島津日新斎であったともいわれる）古歌であるが、国歌「君が代」は本曲に由来するとも言われている[16]。

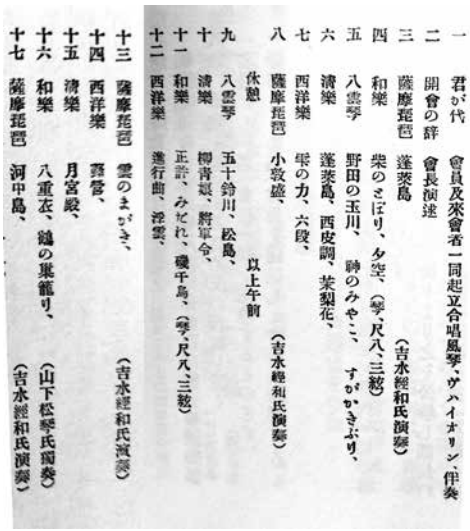
一　君が代　會員及來會者一同起立合唱鳳琴・ヴハイオリン伴奏
二　開會の辞　會長演述
三　薩摩琵琶　蓬萊島　（吉水經和氏演奏）
四　和樂　柴のとぼり、夕空、（琴、尺八、三絃）
五　八雲琴　野田の玉川、　時のみやこ、　すがかきぶり、
六　清樂　蓬萊島、西皮調、芙梨花、
七　西洋樂　琴の力、六段、
八　薩摩琵琶　小敦盛、　（吉水經和氏演奏）
休憩　以上午前
九　八雲琴　五十鈴川、松島、
十　清樂　柳青瑣、將軍令、
十一　和樂　正詩、みだれ、磯千島、（琴、尺八、三絃）
十二　西洋樂　進行曲、浮雲、
十三　薩摩琵琶　雲のまがき、　（吉水經和氏演奏）
十四　西洋樂　露營、
十五　清樂　月宮殿、
十六　和樂　八重衣、鶴の巣籠り、　（山下松琴氏獨奏）
十七　薩摩琵琶　河中島、　（吉水經和氏演奏）

図１　鳳鳴会第三回大集会の演奏プログラム

（『音楽雑誌』45号、明治27年（1894）６月25日、31－32頁）

以上の演奏会のプログラム（図１）を見ると、日本の音楽の方が目立つ。鳳鳴会は、音楽取調掛で西洋音楽を習った四竈仁爾が会長を務め、西洋楽の部長でいたにも関わらず、やはり西洋音楽よりも明清楽・日本音楽を含めて、広い意味の「音楽」の促進を図ったと見える。そして、薩摩琵琶であるが、名前のとおり、もともと、薩摩の独特な琵琶のタイプと演奏のスタイルであったが、江戸時代から西南の地方で盛んになって、明治時代になると、薩摩藩の武士とともに東京に伝わり、次第に全国に普及した[17]。音の響きがコンサートのステージに最適だということもあったかもしれない。鳳鳴会で演奏した吉水経和は、そのプロセスにおいては重要な人物であった。ちなみに、後で述べるように、薩摩琵琶会は『音楽雑誌』のスポンサーでもあった。

四竈仁爾の仙台における活動・役割は、ある程度は典型的だったのではないかと思われる。音楽取調掛を出て、派遣した府県に戻って、音楽教育に努めた上、研究会や演奏会をもって、音楽の普及にも努めた[18]。演奏会というのは、近代の新しいもので、西洋でもパブリック・コンサートは、大体18世紀以降の近代のものである[19]。

四竈仁爾はそのほか、漢学の教養があり文章が得意で、校歌もふくめて唱歌の歌詞を数多く作った。そして、字を書くのも得意で、書家としても知られ、例えば、記念碑・墓碑銘も書いたのである。そして、四竈仁爾自身にも門人が昭和33年（1958）に建立した記念碑が、遣欧使節として欧州に渡航した支倉常長の墓があることで知られている仙台の光明寺の前にある（図２）。

図２　仙台・光明寺にある四竈仁爾の記念碑（筆者撮影）

ローカルとナショナルを結んで―四竈訥治と『音楽雑誌』

四竈仁爾は、ほかの地域で活躍したローカル・パイオニアと似ているところもあるが、兄の訥治はユニークだったといってもいい。しかし、仁爾の音楽関係の活動は一生続いたのに対して、訥治の場合はその一番活発な時期はほとんど1885年から1900年前後の時期に限られるようである。その期間で訥治は非常に多種多彩な活動に努め、いろいろな意味でのパイオニア・先覚者であったが、ここではローカルとナショナルを結ぶのに一番重要な役割を果たした『音楽雑誌』を中心に論じる。

『音楽雑誌』は日本最初の音楽専門雑誌で、その後で創刊された音楽専門雑誌の原型を作ったといえる。全部で77冊が出たが、四竈訥治自身が編集・出版を務めたのは明治29年（1896）５月28日の第58号までで、その後、二か月間の休刊をはさみ、同年８月８日に刊行された第59号から、出版社は共益商社書店になった。内容にも多少の変更があった。明治29年までの内容は、音楽記事、歌曲、奇書、雑録、参考、社告、広告という欄であって、最初は、小説、問答という欄もあった。記事の多くは、四竈訥治が自分で書いたと思われる。いろいろなペンネームで書いていたようであるが、仙台の「仙」という字を含めたものが多く、訥治は出身の仙台にかなりプライドを持っていたのではないかと推定できる[20]。

では、ローカルとナショナルを結ぶのに一番重要な役割を果たしたとは、どういう意味であろうか。『音楽雑誌』は、次のような役割を果たしたと考えられる。

１．状況の普及
２．音楽活動を巡る話題性作り
３．全国の地域で音楽活躍者の共同体意識を創作

新しい音楽や音楽文化がどのように東京から全国に普及したかを考えると、やはり情報の普及が不可欠であったろう。ここでいう情報とは、西洋音楽・日本音楽・当時非常に人気があった明清楽をふくめての紹介・説明・議論などであり、全国で行われる音楽現状・音楽活動に関する「通信」や演奏会のプログラムと批評などであった。広告も情報の一種といえるだろう。訥治の出版社音楽雑誌社の出版物のため自己宣伝が多いが、オルガンのヤマハと鈴木ヴァイオリンの楽器の広告も多い。その二つの会社は丁度、『音楽雑誌』が創刊されたた明治23年（1890）から、全国で楽器を売ることになったのである。国産の楽器の普及は西洋音楽の受容には重要な条件であった。楽器と同様、訥治らが出版した曲集、独習書などは、音楽の普及に重要な役割を果たした。西洋音楽だけではなく、明治24年（1891）の『清楽独習の友』と明治25年（1892）の『薩摩琵琶歌 初編』がその例であるが、清楽、そして薩摩琵琶のように、もともとある限られた地域の音楽であったジャンルも情報の普及で利益を得たといえよう。

要するに、『音楽雑誌』のおかげで、ほぼ全国にいた購読者は毎月、音楽関係の情報や議論の対象になっていた課題を知ることができたのである。しかも、自分がナショナル・コミュニティー、すなわち、全国に渡る共同体意識を得ることができたのであろう。それに、例えば仙台などにいた読

者は東京やほかの地域からの通信や演奏会批評によって、全国で行われる音楽活動の情報を得ることができたので、全国に及ぶ新しい文化的空間（cultural space）の創造に貢献したと言えないだろうか。東京音楽学校を卒業して、東京から離れた地域で活躍している音楽の教師にとって、かなりの励ましになったのではないかと思われる。

さて、『音楽雑誌』がどのように受けとめられたかについては分からないことが多いが、日下昭夫氏の研究（主に『音楽雑誌』の内容分析であるが）によると、第２号は47か所で販売され、第５号はその数がすでに107か所に上っていたことが窺える[21]。その半分は東京以外のところであった。そして、雑誌には、名誉員客員賛成員の名前が出ているが、第６号から第18号までに150名ほどが掲載され、さらに資金援助した個人と企業の名前も載っている。その中で山葉寅楠が一番目立つが、「田中某（薩摩琵琶一組）」や「薩摩琵琶会」や「東京八雲会」もあるので、『音楽雑誌』に賛同して援助した中に、日本音楽関係の人々も含まれていたことがわかる[22]。雑誌社からは11件、新聞社からは24件に及ぶ『音楽雑誌』の批評が寄せられたが、いずれも高く評価した[23]。

しかし以上の高評、援助を別として、『音楽雑誌』は特に、音楽取調所（明治20年（1887）からは東京音楽学校になったが）を卒業してすぐに、地方で西洋音楽の教育・普及に努めた人々には大きな励ましになったのであろう。『音楽雑誌』に載せられた地方からの通信も、訥治の音楽取調所時代の仲間を含め、そういった地方で音楽活動に努めている人々から寄せられたようである。仙台では訥治の弟の四竈仁爾が活躍していたので、仙台からの通信が特に目立つのは不思議ではない。

日本国内の情報が中心になったのはもちろんであるが、たまに外国の通信もある。外国からの通信といえば、明治末期に創刊された『音楽界』には外国の情報がもっと多く掲載されており、その雑誌はニューヨーク事務所までもっていた。

結論―ローカル・ナショナル・グローバルの相互関係について

以上、大まかに四竈兄弟の履歴と活躍を紹介した。その二人の兄弟の履歴を見て驚いたのは、二人とも、西洋音楽の知識や演奏の経験は非常に限られていたことである。音楽取調所に入学する前の音楽活動・経験は明らかではない。四竈訥治は、明治７、８年から音楽に興味を持ったと主張しているが、その程度は分からない。それにも関わらず、二人とも西洋音楽の普及のために宣教師（ミッショナリー）の熱意で努力した。四竈仁爾の活動はほとんど仙台に限られていたが、四竈訥治は東京と（1896年以降）仙台・東北で活躍したし、出版活動は全国に及び、ナショナルのレベルでもパイオニア的な影響を及ぼしたといえるだろう。その影響のあり方と程度は、どこまで知ることができるか、今のところは測りがたいが、少なくとも全国に読者の興味を惹いた『音楽雑誌』の意味は大きかったと思われる。

グローバル化までは言えないかもしれないが、音楽改良という国民のためのふさわしい音楽を作ることを主張したのは、やはり、自国が19世紀の国民国家の世界では、いわゆる万国対峙のために、その世界で通用するナショナル・ミュージック、すなわち国楽を創造しなければならなかったからであろう。ただ、最終的にはその「世界で通用するナショナル・ミュージック」というのはヨーロッパの芸術音楽、すなわちいわゆるクラッシック音楽に基づくものであった。しかし、西洋音楽の覇権は最初から決まっていたわけではない。「音楽改良」とは、西洋音楽だけではなかった。西洋音楽、明清楽、日本音楽を含めた、新しい音楽といった方がいいだろう。

国民国家の世界はいわゆるグローバルな近代（モダニティ）の特徴と条件であると同様に、国楽が国民国家に必要だとすれば、音楽には、音楽の近代、ミュージカル・モダニティがあるといっ

てもいいだろう。音楽自体の話だけではない。むしろ、演奏会や音楽講習会などの設立、音楽雑誌の出版など、さまざまな音楽関係の活動に及ぶのである。四竈兄弟の幅広い活動はその例である。

その二人の努力をみると驚くのは、なぜ、西洋音楽のトレーニングや知識が浅いにも関わらず、宣教師（ミッショナリー）の熱意でその普及に努めたのであろうか。今でも多少は謎だが、仮に回答するならば、次のようにいえよう。

一つは、西洋音楽の普及よりも、西洋音楽を含めた新しい音楽文化の普及というつもりで活動したのではないかと思われる。ただ、西洋音楽は特にモダンというイメージも付いていたと考えられる。

もう一つは、音楽が「文明」国には不可欠なものであるという前提で行動した。その考え方は『音楽雑誌』の記事にも表れる[24]。

さらに一つは、明治時代の教育のエリートの漢学教養と礼楽思想であると思われる[25]。治国のための音楽の役割を強調する礼楽思想と西洋における音楽の役割についての議論、例えば学校教育における唱歌教育の位置付けを観察した明治のエリートは、その共通点に気が付いたのである。久米邦武も岩倉使節団のサンフランシスコで学校での唱歌演奏についてこういう風に述べている。

> 唱歌ハ小学ノ日課ニテ、以テ天神ニツカヘ、…コト、陶唐典楽官ノ胄子ヲ育スル意ニ暗合ス[26]

四竈兄弟は二人とも漢文が得意なことで知られていたが、明治時代（少なくとも明治初期・中期）の教育機関において過半数を占めた士族は漢学教育を受けたのであった。

最後になるが、明治時代に注目すると、今の日本とどんなに違ったことか興味深い[27]。例えば、仙台は東北地方であるが、東北地方というと、遅れたとか未開というイメージが現在にもある。西洋音楽の場合、現在でも、音楽専門の大学がなく、有名なスズキメソードのスタジオもあまりないと聞く。またプロの交響楽団は仙台にしかないなどというのも、その未開のイメージを反映していると言えるだろう。しかし明治時代の仙台における音楽文化は、ある意味では東京に遅れたといっても、調べてみると大変盛んであったという印象である。

要するに、地域のレベルでさまざまな活動によって、西洋音楽の普及をふくめて音楽の発展に努めた地域の活躍者（local actors）に充分に気をつけないと、日本におけるいわゆる「triumph of Western music」(西洋音楽の勝利)を充分に理解できないであろう。

注

1　この小論文の一部はすでに出版されている。Margaret Mehl, "Between the Global, the National and the Local in Japan: Two Musical Pioneers from Sendai," *Itinerario* 41 no.2, 2017, pp.305-325.

2　マーガレット・メール［著］、千葉功、松沢裕作［訳者代表］『歴史と国家―19世紀日本のナショナル・アイデンティティと学問』東京大学出版会、2018年、4、199頁。英語版は、Margaret Mehl, *History and the State in Nineteenth-Century Japan*, Basingstoke and London: Macmillan, 1998. 2017年The Sound Book Pressより再出版。

3　Christopher L Hill, *National History and the World of Nations: Capital, State, and the Rhetoric of History in Japan, France, and the United States*, Durham and London: Duke University Press, 2008.

4　Jürgen Osterhammel, *The Transformation of the World: A Global History of the Nineteenth Century*, trans. Patrick Camiller, Princeton: Princeton University Press, 2014; Sebastian Conrad, *What is Global History?* Princeton: Princeton University Press, 2016.

5　Sebastian Conrad, *The Quest for the Lost Nation: Writing History in Germany and Japan in the American Century*, transl. Alan Nothnagle, Berkeley : University of California Press, 2010.

6　Jürgen Osterhammel, „Globale Horizonte europäischer Kunstmusik, 1860-1930," *Geschichte und Gesellschaft* 38 no.1 2012, pp. 86-132.

7　Tim Blanning, *The Triumph of Music: Composers,*

Musicians and Their Audiences, 1700 to the Present, London: Allan Lane (Penguin), 2008.

8　Margaret Mehl, *Not by Love Alone: The Violin in Japan, 1850-2010*. Copenhagen: The Sound Book Press, 2014.

9　『音楽雑誌』第17号、明治25年（1892）２月、16頁。

10　伊沢について、奥中康人『国家と音楽―伊沢修二がめざした日本近代』(春秋社、2008年) が詳しい。

11　増井敬二「音楽雑誌（おむがく）解題」『音楽雑誌補巻』出版科学総合研究所、1984年。

12　渡邊慎也「仙台初の唱歌教師　四竈訥治」(『仙臺文化』第11号、2009年)、大村栄『養賢堂からの出発―教育百年史余話１』(ぎょうせい、1986年)。

13　『音楽雑誌』33号、明治26年（1893）６月、21頁。

14　『音楽雑誌』45号、明治27年 (1894) ６月、31－33頁。

15　Margaret Mehl, "Japan's Early Twentieth-Century Violin Boom," *Nineteenth-Century Music Review*, 7 no.1, 2010, pp. 21-43. 石原睦子「明治期関西におけるヴァイオリン受容の様相」『音楽研究』11巻、1993年、110－111頁。

16　秋原秋彦編『注解薩摩琵琶歌集』鹿児島: 龍洋会、1966年。

17　島津正『薩摩琵琶歌』東京：ぺりかん社、2001年。

18　もう一つの例は、愛知県と三重県を中心に活躍した恒川鐐之助である（井上さつき「恒川鐐之助と明治期日本の音楽」『愛知県立芸術大学紀要 』41号、2011年、19－31頁。

19　T. ブランイングのいわゆるPlaces and spaces（場所・空間）Blanning, *Triumph*をみよ。

20　増井敬二「音楽雑誌（おむがく）解題」『音楽雑誌補巻』出版科学総合研究所、1984年。

21　日下昭夫「『音楽雑誌』に見る四竈訥治の啓蒙活動とその広がり―受容の視点から（その１）」『青森明の星短期大学紀要』第24号、1998年)。同「『音楽雑誌』に見る四竈訥治の啓蒙活動とその広がり―受容の視点から（その２）『青森明の星短期大学紀要』第26号、2000年。

22　日下「『音楽雑誌』に見る四竈訥次の啓蒙活動とその広がり―受容の視点から（その１）」、65頁。

23　日下「『音楽雑誌』に見る四竈訥次の啓蒙活動とその広がり―受容の視点から（その２）」、45頁。

24　例えば、四竈訥治「発刊の主旨」『音楽雑誌』第１号（明治23年（1890）９月、１－３頁)、同「日本音楽」『音楽雑誌』第21号（明治25年（1892）６月、11頁)、「吾音楽雑誌」『音楽雑誌』第17号（明治25年（1892）２月、16頁)。

25　北原かな子「『邦楽』と『洋楽』―二つの音楽世界に生きた人々」『江戸―明治 連続する歴史（別冊環23)』藤原書店、2018年１月。

26　久米邦武編、田中彰校注『米欧回覧実記（1)』岩波文庫、1977年、88頁。

27　中央（東京）と地域の音楽文化の違いについては、渡辺裕『日本文化モダン・ラプソディー』(春秋社、2002年）も述べた。地域における音楽の教師については、坂本麻実子『明治中等音楽教育の研究―「田舎教師」とその時代』(風間書房、2006年）を参照。

参考文献

Tim Blanning, *The Triumph of Music: Composers, Musicians and Their Audiences, 1700 to the Present*, London: Allan Lane (Penguin), 2008.

Sebastian Conrad, *What is Global History?* Princeton: Princeton University Press, 2016.

Sebastian Conrad, *The Quest for the Lost Nation: Writing History in Germany and Japan in the American Century*, transl. Alan Nothnagle, Berkeley: University of California Press, 2010.

Christopher L Hill, *National History and the World of Nations: Capital, State, and the Rhetoric of History in Japan, France, and the United States*, Durham and London: Duke University Press, 2008.

Margaret Mehl, "Japan's Early Twentieth-Century Violin Boom," *Nineteenth-Century Music Review*, 7 no.1, 2010, pp. 21-43.

Mehl, Margaret. *Not by Love Alone: The Violin in Japan, 1850-2010*. Copenhagen: The Sound Book Press, 2014.

Margaret Mehl, "Between the Global, the National and the Local in Japan: Two Musical Pioneers from Sendai," *Itinerario* 41 no.2, 2017, pp. 305-325.

Margaret Mehl, *History and the State in Nineteenth-Century Japan*, Basingstoke and London: Macmillan, 1998. 2017年The Sound Book Pressより再出版。

マーガレット・メール［著］、千葉功・松沢裕作［訳者代表］『歴史と国家―19世紀日本のナショナル・アイデンティティと学問』東京大学出版会、2018年

Jürgen Osterhammel, „Globale Horizonte europäischer Kunstmusik, 1860-1930," *Geschichte und Gesellschaft* 38 no.1 2012, pp. 86-132.

Jürgen Osterhammel, *The Transformation of the World: A Global History of the Nineteenth Century*, trans. Patrick Camiller, Princeton: Princeton University Press, 2014.

秋原秋彦編『注解薩摩琵琶歌集』鹿児島:龍洋会 1966年

井上さつき「恒川鐐之助と明治期日本の音楽」『愛知県立芸術大学紀要 』41号、2011年、19－31頁

大村栄『養賢堂からの出発―教育百年史余話1』ぎょうせい、1986年
奥中康人『国家と音楽―伊沢修二がめざした日本近代』春秋社、2008年
北原かな子「『邦楽』と『洋楽』―二つの音楽世界に生きた人々」『江戸―明治 連続する歴史（別冊 環23）』藤原書店、2018年１月
日下昭夫「『音楽雑誌』に見る四竈訥治の啓蒙活動とその広がり―受容の視点から（その１）」『青森明の星短期大学紀要』第24号、1998年
日下昭夫「『音楽雑誌』に見る四竈訥治の啓蒙活動とその広がり―受容の視点から（その２）『青森明の星短期大学紀要』第26号、2000年
坂本麻実子『明治中等音楽教育の研究―「田舎教師」とその時代』風間書房、2006年
島津正『薩摩琵琶歌』東京：ぺりかん社、2001年
増井敬二「音楽雑誌（おむがく）解題」『音楽雑誌補巻』出版科学総合研究所、1984年
渡邊慎也「仙台初の唱歌教師　四竈訥治」『仙臺文化』第11号、2009年
渡辺裕『日本文化モダン・ラプソディー』春秋社、2002年